

奨励金No.1608

次世代の身体を育んだ洋裁技術の普及：子ども服の洋装化を実現させた母親の学び・ネットワーク形成を中心に

難波 知子

お茶の水女子大学 准教授

Dressmaking technology that nurtured the bodies of the next generation: The learning and network of mothers who designed Western-style children's clothes

Tomoko Namba

Ochanomizu University, Associate Professor



さまざまな技術革新や社会変動を経験しながら、めまぐるしく変化していく社会を生きる私たちは、次世代を担う子どもたちに何を与えることができるだろうか。今から100年ほど前の母親たちは、自身は洋装・洋裁の経験が乏しいにも関わらず、子どもに洋服を与えるために洋裁技術を習得し、新しい時代を生きる次世代の身体を育成した。本研究では、母親に子ども洋服づくりの知識と技術を与えた「子ども洋服講習会」に着目し、誰がどのように学びの場を提供し、子ども洋服に関する洋裁技術習得のネットワークが広がっていったのかを明らかにする。

Living in a rapidly changing society that is experiencing various technological innovations and social change, what can we give now to the children who will lead the next generation? About 100 years ago, mothers learned dressmaking to provide clothes for their children, although they had little experience with Western clothing or with the craft making them, and they developed the bodies of the generation that followed, who would live in a new era. This study focuses on children's clothing seminars, which provided mothers with the knowledge and skills to make children's clothes, and it examines who provided these learning opportunities, and how networks for acquiring dressmaking skills for children's clothes expanded.

1. 研究内容

1. 目的と課題

日本における子ども服の洋装化は、科学的・合理的観点から家庭生活を見直す生活改善運動が活発化する1920年前後より積極的に推奨されていく。着物に比べ、機能・衛生面が評価された洋服は、とりわけ身体の発育期にある子どもにふさわしいとされ、大人に先駆けて洋装化が進められた。しかし当時、既製服産業が十分に発達しておらず、子どもに洋服を着せるためには、家庭で母親が製

作するほかなかった。本研究では、自身は洋裁・洋装経験が乏しい母親がいかに子どものために洋服製作を学んだのかを明らかにするために、学びの機会としての「子ども洋服講習会」に着目し、以下の3つの課題を検討する。

- ①明治から昭和戦前期までに開催された子ども洋服講習会を新聞記事から抽出し、講習会の概要を整理し、洋裁技術を学ぶ機会を提供したのは誰かを明らかにする。
- ②子ども洋服講習会の主催者の中でも、特に

女学校・同窓会の活動を取り上げ、女性たちの学びのネットワークの形成と機能について検証する。

- ③婦人雑誌社主催の講習会記事から、詳細な講習内容や誌面を通じての学びの様子を確認し、洋裁初学者がどのように洋服製作を学んだのかを考察する。

2. 研究成果

2.1 子ども洋服講習会の開催概要—学ぶ機会の提供者

朝日新聞と読売新聞に掲載された子ども洋服講習会記事を収集した結果、1918（大正7）年から1941（昭和16年）年までの間に86件の子ども洋服講習会の開催が確認できた。もっとも早い実施例は、1918年の日本女子大学校同窓会（桜楓会）主催の「西洋裁縫の講習」（12～13歳の女児服）である。開催数は1922（大正11）年に14件、関東大震災後の1924（大正13）年に16件とピークを迎える。講習会の主催者は、A）女学校・同窓会や裁縫学校・洋服学校、B）各種協会・女性団体、C）新聞雑誌社、D）教育会・文部省・自治体、E）宗教団体、F）その他（手芸店・婚礼調度相談所ほか）など、多種多様な組織や団体が講習会を開催した様子が窺える。家庭に入った女性たちに子ども洋服製作という学びの機会を提供した主な団体・組織は、女学校の同窓会、愛国婦人会や日本婦人協会などの女性団体、『婦人世界』や『婦女新聞』をはじめとする新聞雑誌社、仏教やキリスト教の婦人会などであった。女性をめぐる複数のネットワークが機能し、子ども洋服製作の技術を家庭の女性たちに伝えていったと考えられる。

2.2 女学校および同窓会が主催した講習会—女性の学びのネットワーク

上記で述べたように、子ども洋服講習会はさまざまな組織や団体により主催されたが、本研究では特に女学校およびその同窓会が主催した講習会

に着目し、女性の学びのネットワークがどのように形成・機能していたかを検証する。取り上げる事例は、東京女子高等師範学校の同窓会（桜蔭会）と共立女子学園（共立女子専門学校）である。

2.2.1 東京女子高等師範学校の同窓会（桜蔭会）

東京女子高等師範学校の同窓会（桜蔭会）では、同窓生向けに夏期講習会が1906～7（明治39～40）年、1916～1939（大正5～昭和14）年まではほぼ毎年開催された。東京女高師の卒業生は教職に就くことが義務づけられたため、有職者の参加を考慮して、学校が夏休みの期間に講習会が企画された。夏期講習会では、同窓生の職業生活や家庭生活に役立てられる内容が取り上げられ、地方に散らばった同窓生のつながりを形成、強化する様子が確認できた。

こうした同窓生同士の学びのネットワークの中で、桜蔭会では子ども洋服講習会が5回開催された（表1）。1919（大正8）年に開催された講習会では、高木すず子により「婦人下ばき」2種、同じく女性向けの下着と思われる「カンビネーション」2種、「嬰兒服」、「ペチコート」、「女児洋服」、「男児洋服」が講習され、47名の参加があった。同窓会誌によれば、1922（大正11）年にも子ども洋服講習会が企画されたが、他の団体でも同様の企画があったことから、この年の実施は見送られた。子ども服洋装化の時流に合わせて、桜蔭会でも同窓生に向けて子ども洋服の講習会が実施されたが、製作対象は子ども服だけでなく、成人の女性洋服も含まれた。教員という職業を持った東京女高師の同窓生は、自身が洋装することによって、各地域の女児や女性の洋装化を先導する役割も期待されていたと考えられ、自身の洋装の実現のために講習会が役立てられた可能性もある。

2.2.2 共立女子学園（共立女子専門学校）

共立女子学園の母体である1886（明治19）年創立の共立女子職業学校は、1908（明治41）年に初めて講習会を行ったが、これは洗濯色染に関する内容で新設する学科の宣伝を兼ねた。

【表1】桜蔭会主催の子ども洋服講習会

	開催年	講習内容	講師
1	1919（大正8）年	婦人下ばき及び小児洋服	高木スズ
2	1923（大正12）年	婦人子供洋服裁縫	平川芳太郎
3	1925（大正14）年	婦人子供洋服の着方及裁縫	木田翠明
4	1929（昭和4）年	婦人子供洋服の裁縫	大井まさ
5	1930（昭和5）年	婦人子供洋服の裁縫	大井まさ

（出典）桜蔭会編『桜蔭会史』1941年より筆者作成

洋服に関する講習会は、1928（昭和3）年に設置された共立女子専門学校主催のものが早く、学園の同窓会誌上で宣伝、事後報告がなされた。それによれば、1932～38（昭和7～13）年まで、毎年夏休み期間中に1日7～8時間の講習が7～10日にわたって開催された。開催中は、洋裁のほか専門学校の授業科目に準じた教科（編物、刺繍など計5、6科目）で時間割が組まれ、受講者は1教科2、3円で好きな科目を選択できた。洋裁の講師は、同校教員である村瀬初代が中心となり、子ども服と婦人服の原型の作り方から応用まで教えた。殊に子ども服は「男女児オーバーコート及ケープの裁ち方」「女児服下着の裁ち方」（1934（昭和9）年）等も加えて洋服一式を扱った。受講資格は「当校卒業生及中等学校並小学校等ニ於テ右受講科目担当者其ノ他一般希望者」としたが、実際の参加者は大部分が本校卒業生、在校生及び母校教員であった。最も多い年で1936（昭和11）年に計301名（うち洋裁75名）の参加を記録している。また、講習会当日の夕方には同窓会が年に一度の親睦会を開催した。学園と同窓会が協同して女性の学びと親睦のネットワークを連関させることで、より精力的な活動を目指したと考えられる。

2.3 婦人雑誌における子ども洋服講習の展開

新聞雑誌社の中で子ども洋服講習会の開催が確認できたのは、婦人世界、婦女新聞社、アサヒグラフ、読売新聞社である。婦人世界が大正10

（1921）年3月に主催した「子供洋服裁縫講習会」では高木鐸子を講師に迎え、男女児洋服、帽子、下着、エプロンなど多彩な講習科目が7日間にわたり講習された。講師の高木は、婦人世界の誌面にすでに子供洋服の記事を掲載しており、雑誌購読者は誌面で高木の記事を参考にしながら、講習会に参加して対面で教授を受けることもできた。また大正11（1922）年7月に婦女新聞社が主催した「子供洋服手芸講習会」は、講師を東京女高師の神田順、高橋イネ、寺尾さくが務め、6日間行われた。同年7月30日発行の『婦女新聞』は「子供洋服号」の特集号として、対面で行われた講習内容が誌面で伝えられた。新聞や雑誌には大正期以降、子ども洋服のつくり方が頻繁に掲載されていくが、並行して実際に指導が受けられる講習会を開催することで、誌面で洋服製作の記事を読み解き、実践できる読者を育てていったと考えられる。

3. 今後の課題

本研究では、子ども洋服講習会というイベントを取り上げたが、女学校の同窓会や婦人雑誌社からは講習の内容を記載した「講習録」が刊行されていたことが確認できる。今後、各機関から刊行された講習録を調査し、誌面上で行われた講習内容を検討することを今後の課題とする。

2. 発表（研究成果の発表）

【口頭発表】

1. 平田麻里子「同窓会ネットワークによる洋服に関する知識と製作技能の普及—共立女子学園における戦前の取り組みを事例に一」、第25回服飾文化学会大会（文化学園大学）、2024年5月18日。
2. 難波知子「明治から昭和初期における同窓会主催の講習会—卒業後の学びと教員ネットワーク」、第26回国際日本学シンポジウム「卒業後のわたしたち—現在・過去・未来—」（オンライン開催）、2024年7月24日。
3. 平田麻里子「戦前の女学校における家政系講習会開催の意義—共立女子学園の取り組みを中心に—」、第26回服飾文化学会大会（共立女子大学）、2025年5月17日。

【論文】

1. 難波知子「明治から昭和初期における桜蔭会主催の講習会—卒業後の学びと教員ネットワーク」、『比較日本学教育研究部門研究年報』（お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所）、第21号、15–24頁、2025年3月。